

ブルナーの教育論に関する一考察(5)

—第二次世界大戦後に焦点を当てて—

今井 康晴
(2015 年 12 月 22 日受理)

Study of Bruner's Educational Theory(5) —Focusing on After World War II—

Yasuharu IMAI

This study examined the formation process of the education theory of Bruner from his autobiography. In this paper, I focus on After World War II. After the war, he began again the study of psychology. The main point of view, was the world of psychology called World Three. It is, in psychology with a focus on culture, Bruner was studied this. This paper examined the relationship between Bruner and World Three.

Key words: Bruner, World War II, New Look

キーワード: ブルナー、第二次世界大戦、ニュー・ルック

はじめに

本研究は、ブルナー (Jerome Bruner 1915-) の教育論の形成過程を、彼の自伝的著作『心を探して ブルナー 自伝』(*In Search of Mind Essays in Autobiography*) を主な資料として考察した。拙稿「ブルナーの教育論に関する一考察(4) —大学時代を中心に—¹⁾」では大学時代を中心に、ブルナーの思想を明らかにした。

1933 年からデューク大学に入学し、徐々に心理学の世界へと歩み始めた。彼はマクドゥーガル、ドナルド・キース・アダムスといった時代を彩った心理学者から学び、心理学者としての素地、例えば、アダムス＝ソーンダイク論争では、後の「仮説理論」など、素地を形成していった。その他にも、オルダス・ハックスレー、マーガレット・ミード、エドナ・ミレーなど、当時の英知が集結していた。

そして、ハーヴァード大学へと進学し、ゴードン・オルポートやヘンリー・マレーらに影響を受け、特にギャリクス・ボーリングを父と慕うほどであった。ハーヴァード大学院時代のブルナーは、実験心理を基礎に心理学の巨人から指導されていた。それは彼にとって最も知的探究心の溢れた時期であり、充実した日々であった。

しかしながら、認知心理学からのアプローチに可能性を見出していたこと、また批判的思考を主体とする研究への姿勢からか、オルポート、マレー、ボーリングと心理学的、本質的な同一性を見出すには至っていない。

こうした心理学への関わりと同時に、大学時代から本稿も含め、ブルナー研究における重要なキーワードが「戦争」である。彼は、ヒトラーへの反発、独裁への怒り、共産主義的な弱者救済といった理念を基に、「交戦国の宣伝放送の特徴」という学位論文の形で戦争への参加となった。

以上、大学期をふまえ、本稿では引き続き、第二次世界大戦との関わり、研究活動などを中心に明らかにする。

1. 第二次世界大戦とブルナー

ブルナーは、ハーヴァードの大学院以降、戦争との関わりを深めていった。彼は、心理学をいかして交戦国の情報を収集し、読み解くという業務にあたっていた。その経験を基に、初の著作『人びとからの指令』(*Mandate from the People*) を作成した。この著作は、戦争に関する世論調査データをまとめ、アメリカの世論を語るものであった²⁾。

これを皮切りに、より戦争への直接参加を望むようになったブルーナーは、軍隊への入隊を決意する。しかし、生まれながらの弱視もあって、入隊が叶うことはなかった。それでも、戦時情報部として、連合国軍が進軍し、通過した地域の人々の精神状態や政治状況を調査する任務にあたった³。

そして、「フランスの大学社会との文化交流」では、サルトル⁴との出会いなどが述べられている。

芸術家というのは「歴史の範囲内で知覚の自由をめざして努力するものであり、それが芸術家の社会への貢献なのだ」と彼は言った。芸術家は超越するが、しかし現実に関わっている。小説を書くこと、戯曲を書くこと、哲学を書くこと、時事評論を書くこと、それらの間にサルトルは断絶を見ない⁵。

サルトルも極度の斜視であったため厚い眼鏡をしていた。そうしたこともあってブルーナーは、親近感を見出していた。こうした「文化交流をすること」は、彼にとって違和感なく、むしろ得意としていたため、26歳の人間にとっては夢のように評していた⁶。

1945年、第二次世界大戦終戦と同時に、ブルーナーも終戦を迎えた。そして、彼は、外部からの視聴者調査の仕事の委託を断り、ハーヴァードでの仕事、つまり好奇心を満たす知的問題に取り組む研究を選択した。以後、27年間ケンブリッジに住み、問題や理論、議論など、いわゆる科学、思想、論理などカール・ポパー⁷が第3の世界と称した知的問題や論争に携わることとなった。

2. 戦地からハーヴァードへ

終戦を迎え、ハーヴァード大学へ戻ったブルーナーは、四半世紀の間に芸術界は、大きな変化を遂げていた。彼が学生だったとき、心理学は、感覚論、経験論、客観主義、物理主義が主流となっていた。ブルーナーが支持した学者たちもこの流れと逆行していた。彼は、研究をするにあたり、従来の感覚論、客観主義に基づく心理学と文化的、神話的に基づく心理学といった2つの葛藤にあった。

ゲシュタルト心理学、ジクムント・フロイト、文化人類学者たちは、経験それ自体の社会的起源を主張し、われわれが知ったり経験したりするものは、その意味を、文化や象徴、神話といった世界から得てくるのであり、しかもそれらの世界は物理学や物理的刺激の世界とほとんど関係がないというの

だった。これはすべて、「少数派」の世界3であった。私の中には、この少数派のほうの海図を旅したいという気持ちがあった。けれども一方では、この世界だけを切り離して航海したくはないという思いもあった。ゲシュタルト理論、ジクムント・フロイト、そして文化人類学者たち、それはいい。けれども、感覚論、連合、客観主義、物理主義といった、世界3の強力な道具を使って仕事をするということにも魅力があったのである。⁸

以降、自伝のなかでは世界3について述べている。その主要な観点は、衰退した感覚論、生得論に代わる心理学の台頭、フォン・ノイマン、チョムスキー、ピアジェ、ヴィゴツキーといった世界3の新しい英雄との関わりにおいて成されている⁹。そして、①感覚論という土壌からの知覚の解放、②直接的に思考を研究すること、③心の起源、④言語の習得、及び思考の道具としての言語、⑤教育について、という展開で進められる。しかし、いわゆる、一般的自伝とは異なり、①～⑤までが時系列で示されているわけではない。ブルーナーは自身の興味の中心の変遷を追っているとしている¹⁰。

1947年、彼は浮上せずに何週間も動き続ける原子力潜水艦の乗組員のストレスに関する研究の議長に任命された¹¹。ハーヴァードでは、アカデミックな精神に基づく、心理学が社会学や社会人類学と結びつき新しい学問を作るといった革命を目の当たりにした。無論、ブルーナーもその新しい学問集団へと参加していったが、「古い学科」を捨てることは出来なかった。

私は、世界3の二組の地図を使おうとしながら、両方の学科で教えた。社会関係学科の方は、結局より大きな巨視社会的な問題に焦点を絞るようになった。ことによるとその反動だろう、心理学科の方はオペラント条件付けや精神物理学の細部へと、その焦点を狭めたのである。¹²

そして、例えば彼が二つの領域を横断したとしても、心理学の核心と考える「精神の力とその可能性実現についての研究」を、追求することとはならなかった¹³ 1951年～1952年の一年間、研究休暇でプリンストンの高等研究所 (Institute for Advanced Study) に出向き、心理学の分裂について熟考したブルーナーは、後の心理学研究の礎となる「認知研究プロジェクト」を立ち上げることとなった。

本プロジェクトでは、周知のように、「思考とその発達」について研究し、5年後の1960年には、ジョージ・

ミラーと協同し、認知研究センターを運営した¹⁴。以上の彼の研究過程を辿ると、従来の心理学からの脱却と同時に、文化や象徴といった従来の心理学では扱わない第3の世界と称する世界の追求へと進んでいった。

しかし、それは従来の行動科学に基づく研究から切り離すことではなく、行動科学と認知科学の両方の領域を横断する研究となっていた¹⁵。

3. ニュー・ルックについて

そしてブルーナーは、1956年に『思考の研究』を発表する。本書を執筆した当時について、彼は、以下のように示した。

思考が経験を生み出すのか、それとも経験が思考を生み出すのか、これを問うところまでは全くいかなかったが、しかし、15歳のときにその二つの見方のうち、一方かそれとも他方かをきっぱりとえらぶことになったとすれば、まちがいなく前者をえらんだことであろう。事物がどのように見えるかということ、知的活動の出発点ではなく、終着点であると私には思われた。¹⁶

「世界をどうみるか」という問いは、「知覚の研究」、あるいは「学習の分析」という二つの異なった概念によって検討された。ブルーナーによると、知覚は世界がどう見えるかということに関係しており、メンタリストティックで現象学的な、本質的にヨーロッパのものとする¹⁷。他方、学習の分析は、世界から受ける影響の結果として生物が何をするかということと関係し、行動主義的で、客観性においてアメリカのものとした¹⁸。

こうしたなかで、1950年代から1960年代にかけて、ニュー・ルック運動が始まった。ニュー・ルックの台頭により、スキナーを主流とした学習理論は影をひそめ、知覚や情報処理がアメリカ心理学の主流となった。ニュー・ルックとは、態度、価値、期待、精神力などすべてが知覚に影響を与えることとする。ニュー・ルック心理学の旗手とされたブルーナーは、以下のように当時を振り返った。

この転換に私はたいそう心を奪われ、巻きこまれていたので、展開していた出来事から私の先入観を抜き出すことがむずかしい。それにイエーツのいうように「ダンスとダンサーとを区別する」ことができないと認めざるをえないほどにも、私は実に時代

の子なのである。・・・われわれはみんな歴史に巻きこまれている。したがって、私の見たパースペクティブから語る以外どうしようもない。それはしばしば包囲攻撃されたパースペクティブであった。¹⁹

彼はニュー・ルックへの導入として、レオ・ポストマンとの論文「精神物理学的測定における恒常誤差の信頼性」、及びグッドマンとの論文「知覚における構成化の因子としての価値と要求」(Value and need as organizing factors in perception)を挙げた。そして、ニュー・ルックにおける心理学を、従来の実験室内の精神物理学ではなく、市場における精神心理学と示した。つまり、閉鎖された無機質な心理学ではなく、人間味のある、文化的な心理学であった。その典型として、貨幣の実験が挙げられる。

「被験者たち」に統制された中性「刺激」の大きさを判断させる代わりに、私はポケットからじかに取り出したふつうのアメリカの鑄造貨幣、そのコインの大きさを評価するという課題を課した。また被験者として、「訓練された観察者」の代わりに、十歳の学童を使った。五セント、十セント、二十五セント、五十セントの各硬貨の大きさに一致するように、光の点の大きさを調節するというのが彼らのする事だった。子どもたちの半分は、ボストンの富裕な人びとの住む地域の学校の子で、もう半分は、ボストンのスラム街の子だった。・・・硬貨が高価であればあるほど、その大きさの過大評価も増したのである。しかも、貧しい子どもたちは富裕の子どもたちよりも過大に評価した。²⁰

この硬貨の実験には二つの意義をもっていた。それは、中心化傾向の法則に対する再考と恒常誤差に対する再考であった。

中心化傾向の法則は、形の大きさ、明るさ、など連続した大きさが与えられると、その評価は、大きいものをより小さく、小さいものをより大きく判断する傾向にある。大きさの判断では、中間へと引きつけられ、中間より大きいものは小さく過小評価され、中間より小さいものは大きく過大評価される。

ブルーナーの行った硬貨の実験は、その傾向とは逆の結果となった。

二十五セントとか五十セントといった、より大きい硬貨はむしろ大きく評価され、五セントは控えめに評価された。硬貨の価値が、神聖な中心化傾向の法則をあべこべにひっくり返していたのか？恒常誤

差はまた価値を強調しうるのか？われわれは精神物理学者たちの間に、騒ぎを巻き起こした。²¹

また恒常誤差についても、硬貨の価値と大きさという目的に対して、貧富の差という要因によって再検討を促していた。そのことは「富裕な」子どもと「貧しい」子どもという文学的、文化的な要因が新聞などで大きく取り上げられたことも裏付けていた²²。

こうしたニュー・ルックを象徴する硬貨の実験の着想について、偶然ではなく、学部学生の頃から温めていたものとする。

一九三七年のおだやかな春の日であった。私はデュークのキャンパスのはずれにある森へ、出たばかりのクルト・コフカの注目すべき教理的な『ゲシュタルト心理学の原理』を読みに出かけていった。その本は、「行動的」世界と「地理的」世界の検討からはじまっていて、前者は後者の主観的変換だといっているのである。

…コフカは、私の頭の中で形をとりはじめていたジグソー・パズルの一切片であった。ドナルド・アダムズと、無愛想な年配の博物学者 A・S・ピアス—私は彼の動物行動に関する授業をとった—の二人が私に新しい仮説を紹介してくれた。すなわち、いかなる種の生存も、その環境に対する遺伝的な特定の反応のレパートリーに依拠していると同様、その環境を経験する仕方に依拠しているのではないだろうか？それは、ドイツの動物学者フォン・ユクスキュルによって提出された考えで、彼の命題は、地理的世界の中の、生存にとって決定的な側面をえらび出し強調するという、主に固有の主観的世界、すなわち環境世界 (Umwelt) をそれぞれの種はもっているというのだった。…いずれにしても、「行動的」環境という考えは、当時たいそう私の気に懸っていた。

そして、彼は知的な動機だけでなく、情緒的な要因も明らかにした。それは、ブルーナーがデューク大学で出会い好意を抱いていた女性と、「ハムレット」を見に行った時の事だった。「ハムレット」を見終わった後、女性のやりとりにおいて、人生が芸術をなぞるなら、知覚はドラマをなぞるという言葉に着想を得ていた²³。

こうしたニュー・ルックが、「硬貨の大きさ」、つまり、「モノの見かけの大きさ」ということで始まったことに対して、普遍的なメタファーと評した。

4. レオ・ポストマンとの関わり

レオ・ポストマンとの論文「精神物理学的測定における恒常誤差の信頼性」が、ニュー・ルックへの導入であったが、その存在はブルーナーにとって大きな影響をもたらす人物であった。レオ・ポストマンとは、軍隊にも一緒に入隊した間柄で、1940年代後半から1950年代の初めにかけて、切り離すことの出来ない関係と述べていた²⁴。そうした、レオ・ポストマンとの関わりについて、次のように指摘する。

十年近くの間、一緒に働き、そして実験をしたり、データを調べたり、論文を書いたり、次の段階を企画したりしたあらゆる時間、私には一度と彼とけんかをした覚えがない。…レオと私とがどれほどちがっているか、私は一九五五年に彼がハーヴァードからパークレーへ移るまで気づかなかった。…彼はたぶんはじめから、私より気質的に保守的であった。結局、彼の関心は機械的記憶の詳細な研究へと傾き、学界の主だった章の一つを得るだけのことはある熱意と方法で、その分野を追求したのだが、われわれが共同研究をしていた当時には、彼は心理学における自分の立場を模索していた。²⁵

さらにレオ・ポストマンとの対比における、ブルーナー自らの心理学の在り方について、次のように指摘する。

…レオと私とは、ボーリング、オルポート、スティーンズという「家の守り神たち」を共有していた。それで十分だった。二人は、文学や芸術や「人間観」についてさえ、ほとんど話すことはなかった。

…私は内心では第一に一ひどく安っぽいことばだが—知識人であり、そして補助的に科学者であった。彼の中ではその二つがずいぶんと分離していたと思う。私は心理学を、私にとって固有の問題を追求するために使った。私にとって心理学とは、そうした追求のために知性を用いる唯一の仕方であった(し、今もそうである)。…私はいつも、彼らのうちどちらか一方を理解することは、もう一方を理解するのに役立つと信じてきた。そうした見方は、この相補性と「専門分野」の時代にあって、魅力的でも知的に賞賛されるものでもないけれども、しかし私はいつもそう思ってきたし、それを棄てることは出来ないでいる。

レオは主に、心理学における「科学者」であった。しかし彼は、文化的小および倫理的関心がないわけ

はなかった。彼は私とちがひ、それをすべて一つの「全体」にしようという気がなかったのだ。²⁶

以上の、ポストマンとの関わりを検討すると、ポストマンとの関わりそれ自体は、「切り離すことのできない関係²⁷」、「一度とてけんかをした覚えがない²⁸」、「二人はよいコンビであった²⁹」とあるように、非常に良好な間柄であったと言える。とはいえ、良好な間柄であったからこそ、違いが反動として多かったように思われる。例えば、ブルーナーは心理学とは知識であり、科学でもあるという考え方であるが、ポストマンは二つを別個のものと捉えていたり、相補性、包括性、全体性を重視する考え方とも異なっていた。

またアルフレッド・クロバー³⁰とクライド・クラックホーン³¹という二人の文化人類学者になぞらえて、レオ・ポルトマンは、クロバー的、すなわち自分の知っていることを、別々にあるままで満足している。これに対してブルーナー自身は、クラックホーン的、すなわち、知っていることが、つづれ織りのように別個ではなく、それぞれによって織りあがっていると認識した³²。こうした対比の基にそれぞれの心理学の在り方を述べていた。そして、レオ・ポルトマンとの差異を下記のように示した。

彼（ガーナード・マーフィー³³）は心理学を、民主主義社会のよりよき一員となるよう人間を解放するための道具と考えていた。レオはその彼に魅力を感じており、そういう自由主義的な信念を共有していたゴードン・オルポートにも惹かれていた。ことによると私との同盟は、彼にとってそこからの離脱への一歩であったのだ、私にはわからないけれども。ともあれ、われわれの共同研究は、より包括的な倫理的責任へのこだわりなしに、彼を、思い通りに行動するようにずっと自由にした、と私は思う。

われわれは、ちょうどよい時に一緒だった。……彼はたしかに、われわれが仮説を述べそれを検証する仕方について、私がより公平になれるよう助けてくれた。³⁴

5. 「盗み見る眼」について

さらにブルーナーとレオ・ポルトマンは、研究を進め、閥の理念及び知覚の選択性へと展開していった。

ブルーナーの着想は、何かを見たり、聞いたり、感じたりするには平均してどれほど必要なのか、どれほどの露出時間、どれほどの明るさ、どれほど「その物」自体が必要となるのか、その最も根本的な理論は

眼や耳、および絶対的な感受性を測定する方法であったが、このことを、本来の知覚の選択性を研究するための手法として適用した³⁵。

そこで、従来の光や音を使用した実験ではなく、意味のある絵、あるいは言葉を見せ、それらが見えるにはどれくらいの露出時間が必要かを測定した。この手法自体は古くから用いられる手法であったが、露出時間を統制し、全露出時間の間、光の明るさが一定した瞬間露出器を設計し、実験を行った。

実験内容としては、被験者の不安を掻き立てそうなものを含む5文字の言葉を100ほど集め、その被験者に各人に、心に浮かんだ最初の言葉言うように教示し、ひとつずつ言葉を読み上げていった。各被験者の連想反応が最も遅い6つの刺激語、最も早かった6つの語、中間の6つの語、これらを選び出し、数週間後、被験者たちにもう一度、18個の言葉の一つずつ、新しい瞬間露出器で見せた³⁶。

結果、言葉を見るのに必要な時間の量は、その被験者が自由連想するのに要した時間の量から予測されることとなった³⁷。それらの結果をふまえ、次のような結論を示した。

人びとが感情的に脅威を感じそうなものを知覚する場合、「警戒的に」(vigilantly) ないしは「防衛的に」という二つの知覚の仕方があるのだろう、と。というわけで「知覚的防衛」が誕生した。それは、遅れた認知の方であった。一方、警戒は、きわめてすばやい認知であった。知覚的防衛は以後十年間、人びとを怒らせることになった。

それも無理はない。というのも、人びとそれをまづ見ることができたのでなければ、どうやってそれがもしかするとまずいことになるかを知りえたのか。盗み見る眼を通じて何かが入ってきて、そしてそれを入れるのに知覚の正面玄関を開けたものかどうか、知覚者を決めさせたのか？あるいはことによると、被験者たちは当惑して、ただ反応をためらっていただけなのだ。一九四〇年代後半には、われわれの主張は不合理なものに思われた。しかしそういう主張をして、騒ぎをひき起こしてから、前進する以外に道があったのだろうか。ただ少なくともわれわれは、その理論を「きちんと整理する」ことはできた。³⁸

そして、知覚の実験を進めていく中で、章のタイトルでもある「盗み見る眼」が知覚に関する一連の実験において発現された。この「盗み見る眼」という用語は以降、随所に見られる。

さて、価値への最も強い傾倒を示すことばを認知するには、大体千分の七十五秒の露出時間を要し、最も弱い方では千分の百秒、残りはその中間であった。どう考えても、千分の二十五秒の視覚処理時間は無視できない。

…幸いにも、被験者たちが絶対の確信をもつ前に推測するように促されていると、それが明らかになることをわれわれは学んでいた。そして再び、盗み見る眼を通じてある種の「漏洩」(leak)が生じていると思われた。…統計的にいって、被験者が目の前のものを「見る」ことができるより前に、なんらかの「意味」を通じていたという可能性を退けることは出来なかった。われわれはその実験でずいぶん遠くまで行ってしまったが、しかし盗み見る眼の方は、われわれの概念上のお荷物として取り残されていた。³⁹

こうした知覚の研究における「盗み見る眼」こそ、ニュー・ルックであり、このキーワードをもとに、心理学、あるいはニュー・ルックとの向き合い方、接近の仕方へと展開した。

おわりに

本論文では、ブルーナーの第二次世界大戦との関わり、戦後の研究、ニュー・ルックと称される革命的な心理学研究に至るまでを明らかにした。特に、硬貨の実験の結果から、知覚者にとって社会的に価値がある対象物は、知覚的に強調され、またその対象物への欲求が大きいほど強調も大きいと主張した。

この硬貨の実験をふまえると、人間の感覚器官は同じであったとしても、構成される知覚には、社会的背景や文化的背景が強く影響していることを示唆している。この知覚に関わる社会的、文化的という観点は、後年追求される問題であるし、また貧困という問題についても同様のことが言える。

これらをふまえると、彼の心理学研究には、確固たる一貫性が見られる。つまり、心理学を通して諸世界を検討し、そのテーマは社会、文化といった従来の心理学では扱わない第3の世界と称する世界の追求なのである。この文化への追求が、教育や文化心理学へと展開したものと推測される。

また、レオ・ポルトマンとの出会いによる心理学への関わりもブルーナーにとって重要な起点となっていた。最終的には別離をする形となるが、レオ・ポルトマンとの出会いなくして、ニュー・ルックは生み出されなかったであろう。

今後の研究としては、ニュー・ルック心理学に関する省察などについて、さらに検討していきたい。

脚注

- 1 今井康晴 (2013)「ブルーナーの教育論に関する一考察 (4) 一大学時代を中心に」『広島大学大学院教育学研究科学習開発学講座学習開発学研究 6号』223-119 頁
- 2 Bruner, J. (1983), *In Search of Mind : essays in autobiography*, New York: Harper & Row p.45. ジェローム・ブルーナー著; 田中一彦訳 (1993)『心を探して: ブルーナー自伝』みすず書房 73 頁
- 3 Ibid. p.45 同上 74-75 頁
- 4 ジャン＝ポール・サルトル (1905-1980) フランスの哲学者、小説家、劇作家。
- 5 Ibid. Bruner(1983) p.48 前掲 79 頁
- 6 Ibid. p.49 同上 81 頁
- 7 カール・ポパー (1902-1994)。科学的言説の必要条件として反証主義を提唱。
- 8 Ibid. Bruner(1983) p.59 前掲 95 頁
- 9 Ibid. p.60 同上 96 頁
- 10 Ibid. p.61 同上 98 頁
- 11 Ibid. p.62 同上 99 頁
- 12 Ibid. p.63 同上 101 頁
- 13 Ibid. p.63 同上 101 頁
- 14 Ibid. p.64 同上 102 頁
- 15 Ibid. p.64 同上 101-102 頁
- 16 Ibid. p.65 同上 104 頁
- 17 Ibid. p.67 同上 108 頁
- 18 Ibid. p.67 同上 108 頁
- 19 Ibid. pp.67-68 同上 109 頁
- 20 Ibid. pp.69-70 同上 111-112 頁
- 21 Ibid. p.70 同上 112 頁
- 22 Ibid. p.71 同上 113 頁
- 23 Ibid. pp.71-72 同上 114-115 頁
- 24 Ibid. pp.75-76 同上 121 頁
- 25 Ibid. p.76 同上 122 頁
- 26 Ibid. p.76-77 同上 122-124 頁
- 27 Ibid. pp.75-76 同上 121 頁
- 28 Ibid. pp.75-76 同上 121 頁
- 29 Ibid. p.78 同上 125 頁
- 30 アルフレッド・ルイス・クローバー (1876-1960)。アメリカの文化人類学者。
- 31 クライド・クラックホーン (1905-1960)。アメリカの文化人類学者
- 32 Ibid. Bruner(1983) p.77 前掲 124 頁

- 33 ガーナード・マーフィー (1895-1979)。アメリカ
の社会心理学者
- 34 Ibid. Bruner(1983) p.78 前掲 125 頁
- 35 Ibid. p.78 同上 125-126 頁
- 36 Ibid. pp.78-79 同上 127-128 頁
- 37 Ibid. p.79 同上 127-128 頁
- 38 Ibid. pp.79-80 同上 128-129 頁
- 39 Ibid. p.81 同上 131 頁